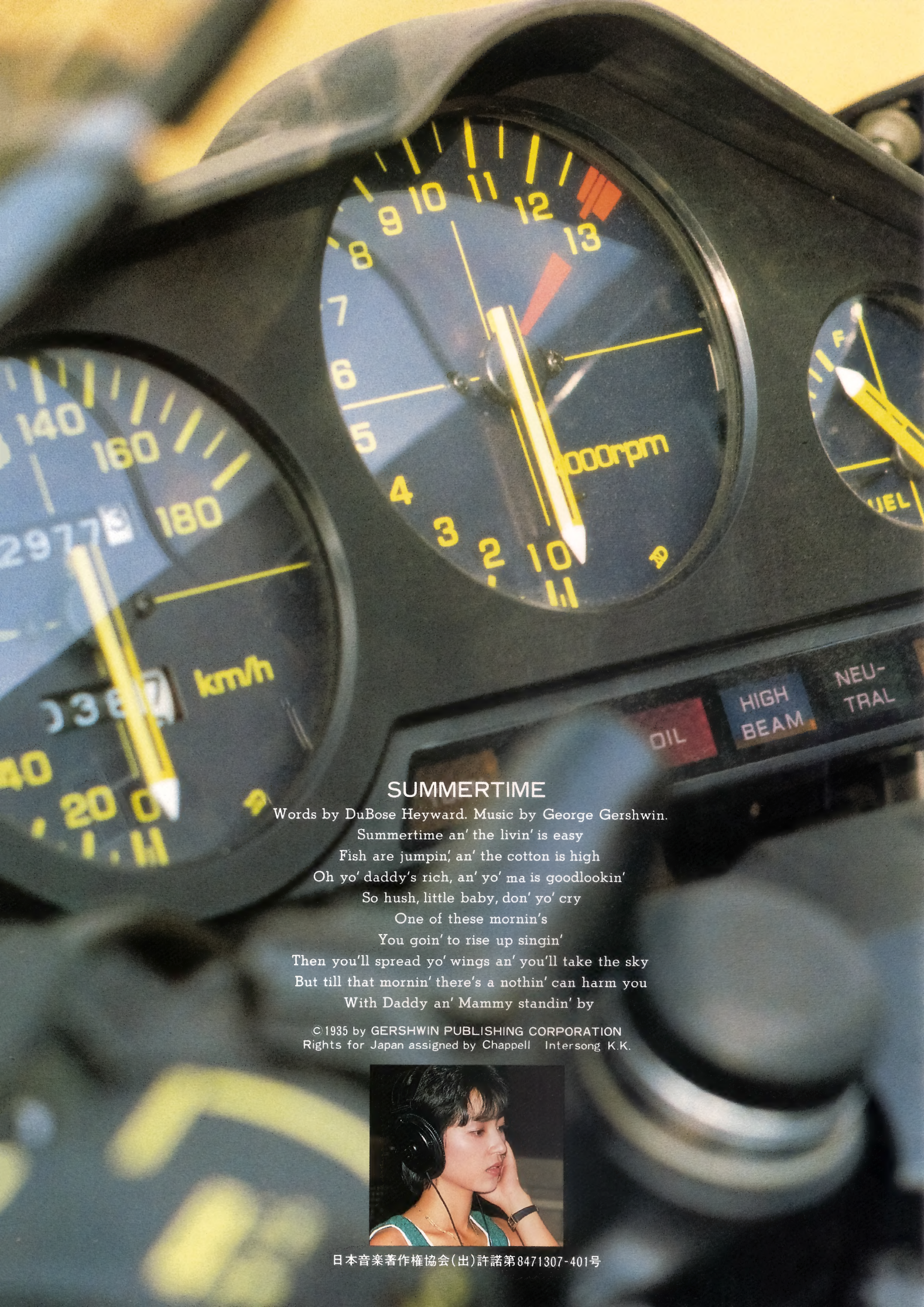
いつか誰かが殺される
NORIKO WATANABE
崔洋一監督作品
角川春樹事務所・東映提携作品

どういう訳か、前二作が奇妙に男中心の世界であったようなので、それもなぜかしら中年男達のステキな話だったのですが、今回は女。それも十八歳の少女の物語です。僕はシネハンで東京を歩きました。近ごろ東京はスゴクおもしろいのです。そして不思議にエキサイティングな街なのです。ややもすると現実の東京の器の大きさに僕達は後追いの傾向があるのだけれど、我らが主人公の少女はそんなことはちっとも意に介さず、わりと勝手に、少し自由に歩き、走り回りたいと想っています。少女は、家族を愛することを自然のことだと思っている人です。でも、まだ他人（ひと）とは恋をしたことがありません。そして恋することと愛することの違いをまだ理屈っぽくしか知りえていません。

〈夏〉に何かの予感をもし持つならば結局、少女も僕もこの映画を創りながら街ですれ違う男達や女達、そしてまだ観ぬ人々との出会いを果たしたいのです。

崔　洋一

SUMMERTIME

Words by DuBose Heyward. Music by George Gershwin.

Summertime an' the livin' is easy
Fish are jumpin', an' the cotton is high
Oh yo' daddy's rich, an' yo' ma is goodlookin'
So hush, little baby, don' yo' cry
One of these mornin's
You goin' to rise up singin'
Then you'll spread yo' wings an' you'll take the sky
But till that mornin' there's a nothin' can harm you
With Daddy an' Mammy standin' by

●解説●

――18歳。少しオトナのサマータイム（夏休み）は危機一髪！

原作は、いま一番読者に評価されているベストセラー作家・赤川次郎の同名小説。誰が、誰を、どのように、なぜ殺したかという過去形で語られがちなミステリーの常套手段が、「いつか誰かが殺される」という書名通りまだ見ぬ未来に反転され物語は展開していく。脚本・高田純はこれをモチーフに、これから起こることへの漠然とした不安、これから出合う男性との恋の予感、それら少女が通りぬける多感な季節の思いを、渡辺典子が演ずるセンシティブな女子高生・守屋敦子のひと夏の出来事を通して現在形で描いている。

監督は崔洋一。鮮烈な印象を残したデビュー作品「十階のモスキート」は今年度ベネチア映画祭でも注目された。男の日常性に潜む狂気、現代のもつ欺瞞からの逸脱をパワフルに描く演出には定評がある。その崔監督が、時代劇「伊賀忍法帖」、非行という社会問題にメスを入れた「積木くずし」、コミカルなミステリー「晴れ、ときどき殺人」と一作ごとにまったくちがった役どころをこなしてきた女優・渡辺典子を、さらにどう変貌させていくのか期待のもてるところである。

ヒロイン典子＝守屋敦子はキュートでアクティブ、しかもウィットに富む少女。その彼女を誰かが狙い始める。父が消え、身につけていたブランドが偽物であることを知り、なにげなく過ごしてきた毎日が疑わしくなってきた。なにものかの影におびえながら、高校生活という日常から遠く遠くジプシーのように地図のないひと夏の旅に出る。彷徨うのはTOKYOというエナジーに溢れた異郷。そんな中で敦子が出合う人々は謎めきながら魅力に満ちている。ちょっとシブめのブティックのオーナー・高良、子連れのイイ女・梨花、自分の若き日を忘れられない大財閥の家長・永山志津、人々はまるで星座をつくるひとつひとつの星のように敦子の回りに集まり輝やき始める。共演には、古尾谷雅人、加藤治子、石橋蓮司、松原千明、尾美としのり、白竜、河原崎長一郎、白川和子ら演技派を中心に異色キャストが揃った。

また映画主題歌は渡辺典子が歌う「いつか誰かが……」（コロムビア・レコード）。「少年ケニヤ」「晴れ、ときどき殺人」に続き作詞・阿木燿子、作曲・宇崎竜童のコンビ第3弾になるが、歌手としても成長した典子を見ることができる。音楽監督には梅林茂。典子が白竜とジャニス・ジョプリン調サマータイムをデュエットする場面をはじめとしてこの映画のテーマにシンクロした音創りをしている。

オトナのひとには通り過ごしてしまったモノ、人と人の間で磨減ったモノを思いださせ、ヤングの人にはしなやかで豊かな表情をもった新しい映画の登場！

10月10日、東映系で全国一斉公開。同時上映は和田誠第一回監督作品、真田広之主演の「麻雀放浪記」。

STAFF

製作/角川春樹

★Haruki Kadokawa

1942年1月8日、富山県生まれ。角川書店社長。76年角川春樹事務所を設立して映画製作に乗り出す。その大胆な発想とバイタリティあふれる行動力で「犬神家の一族」「人間の証明」等を次々と大ヒットさせる。そして、82年「汚れた英雄」で初監督。「愛情物語」を撮り終え、来年公開予定である渡辺典子主演の映画を準備中。映画製作者としてまた監

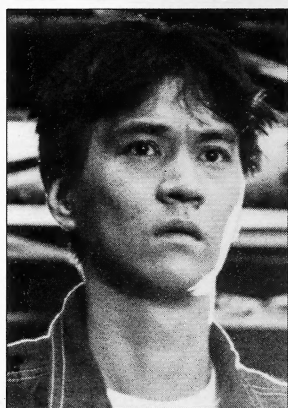
CAST

渡辺典子

1965年7月22日生まれ。蟹座。'82年「角川映画大型新人女優募集」で優勝。'83年正月映画「伊賀忍法帖」でスクリーン・デビュー。「いつか誰かが殺される」は「積木くずし」、そして今春の「晴れ、ときどき殺人」に続く4本目の主演作品。

古尾谷雅人

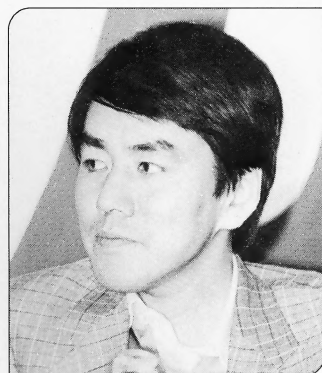
1957年5月14日生まれ。牡牛座。一年間のサラリーマン生活後、'77年「女教師」でデビュー。ハードな男とナイーブな青年を作品ごとに演じわける。代表作に「ヒポクラテスたち」'80、「スローなブギにしてくれ」'81、「悪霊島」'81などがある。

守屋敦子

高校生活最後の夏休みを迎えた少女。学校での成績はバツグン。知性をヘルメットに包みスポーツバイクをとばす。父・陽一の失踪に端を発した国際スパイ事件に巻き込まれてしまうが、高良のグループとの交流により、学園生活とは異なる視点、感覚に目覚める。

高良和夫

偽ブランドばかりを扱うブティックの店長。ソーホーからソーホーへ警察のテイレをくぐりぬけながらTOKYOを漂流する正体不明の無国籍グループのリーダー。既成の考え方、通常の生活感に囚れることのない自由な行動が敦子を戸惑わせ、ひきつける。

督としても、日本映画界の話題の中心となっている。

原作/赤川次郎

★Jiro Akagawa

1948年2月29日、福岡県生まれ。サラリーマン生活を送るかたわら小説を書き続ける。76年に「幽霊列車」でオール讀物推理小説新人賞を受賞。以後、次々と長短編を発表し、映画化された「セーラー服と機関銃」、「探偵物語」は100万部を突破するベストセラー。現在もっとも読者の支持を受けている作家である。「いつか誰かが殺される」は81年に発表されたもので、〝誰が殺したか〟ではなく、〝誰が殺されるか?〟といったこれまでのミステリーとは違った視点で描いた作品である。

監督/崔 洋一

★Youichi Sai

1949年、長野県生まれ。カメラマン志望だったが、高校時代の先輩の誘いで照明助手として映画界へ入る。TV映画の照明、小道具助手などを経て助監督となる。76年「愛のコリーダ」(監督・大島渚)でチーフ助監督を務めたあたりからその力量が注目され、〝ゴジ(長谷川和彦)の次はサイだ〟と監督デビューを待望されていた。その第一回監督作品が、83年「十階のモスキート」(ATG)。その後、にっかつ、TV2時間ドラマ、CFと活躍の場を広げ、今回、渡辺典子主演「いつか誰かが殺される」を演出する。

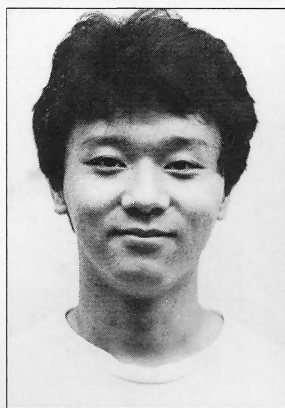
1958年2月18日生まれ。水瓶座。'79年「カネボウ　レディ'80」で優勝。テレビドラマやクイズ番組で活躍。この「いつか誰かが殺される」は初の本格的な映画出演作品である。

松原千明

梨　花

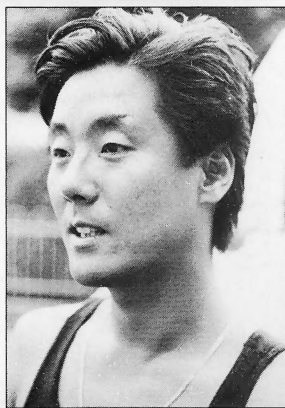
高良と共棲している女性。娘、百合は前に付き合っていた男性との子供である。高良とは互いに束縛しあうことなく生活していて、それでいて理解しあっている。精神的家族におけるイイ母親。

1965年12月7日生まれ。射手座。'78年、映画「火の鳥」でデビュー。「翔んだカップル」'80、「転校生」'82、「時をかける少女」'83と若手俳優のなかにおいては抜群の演技力と存在感をもっている実力派である。

尾美としのり

渡壁正太

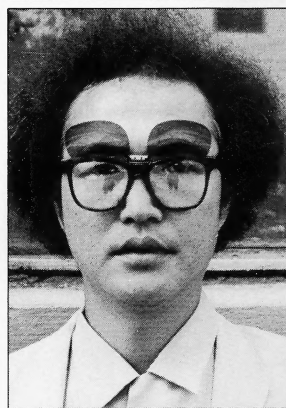
敦子に思いをよせるクラスメートのパソコン少年。敦子に頼まれて事情のわからないまま謎のフロッピーディスクを預かる。自慢のハードウェアでディスクの謎を解くことができるが、敦子との恋のキーワードがなかなか見つからない……。

1952年10月3日生まれ。天秤座。「アリランの唄」'79、「光州City」'82などでロックを「自分の状況、時代の状況を切り拓く音楽である」という方法論を展開してきたミュージシャン。今回は映画初出演、劇中では崔監督作詞の「ミステリアス」も歌っている。

白　竜

趙　烈豪

ニックネームはレッツゴー。高良グループの一員であるが、飄々としてとらえどころのない性格の持主のようだ。グループが集まるパーティのときはバンドのリーダーとしてギターとボーカルを担当。

1941年8月9日生まれ。獅子座。「越後つついし親不知」'64、「網走番外地・望郷篇」'65など、東映を中心に名バイプレイヤーとして活躍。舞台では第7病棟を主宰し演出家としても活動中。コミカルな演技にも味がある。

石橋蓮司

橘　進之介

ヤトワレ迷探偵。財閥・永山家の人捜しゲームの進行役を務める。永山志津から託された招待状を手渡そうと敦子に近づくが、善意の第三者には見えない風貌が誤解のもととなり幾多の困難に遭遇、任務遂行を阻まれ、ボロボロに……。

1922年11月24日生まれ。蠍座。東宝を経て、文学座に入座。退座後、劇団雲設立に参加。映画、舞台、テレビと活動の場は演ずることのすべての分野にわたる。「いつか誰かが殺される」の他にも最近作では、「瀬戸内少年野球団」、「MISHIMA」などで円熟した演技を披露している。

加藤治子

永山志津

亡夫とともに築き上げた永山コンツェルンの会長。出来の悪い子供たちを憂いながら、七十歳の誕生日を迎えた。毎年恒例の「人捜しゲーム」の対象に敦子を選び出し、橘を派遣する。敦子に会うことで過ぎ去りし青春を確かめようと考えている。

ストーリー

いつか誰かが……

「モ・リ・ヤ・ア・ツ・コ」――ゲームは始まった。アール・ディコ調の大広間には、身なりはきちんとしているが、どこか品位に欠ける男女が集まっている。財閥・永山家では毎年家長である志津の誕生日には一堂に会して賭けに興じることになっている。そして今年の趣向は、実在しているかどうか分からない人物を捜し出してパーティーに招待しようというもの。杜夫、亜美、伸也……子供達の名の一文字をそれぞれにとってモリヤアツコなる人物が浮かび、まずはこの世に存在するかどうかが賭けの対象となった。「私は実在する方に一千万円！」。志津がドンと札束をテーブルの上に積み上げた。

いつか誰かに……

守屋敦子（もりやあつこ）、高校3年生、18歳。楽々と偏差値69をキープする学力と、愛車のスポーツ・バイクを走らせ、ギターも弾くアクティブな女の子だ。父の陽一は新聞記者。母はいない。そんな敦子の高校生活最後の夏休みがいま、始まろうとしていた。

いつか誰かの……

本当にひさしぶりの父とのデート。豪華なレストランで食事の後、高級ブランドが並ぶブティックで気に入った服を着付けて試着室を出た敦子の目の前から父の姿が消えていた⁉ 不安にかられた敦子だが、そこは勝気な子。ブティックの店長・高良をツケ馬にして、「家に帰ればお金を払います！」とシャレたバイクで家に帰るのだが、やはり父はいなかった‼

いつか誰かを……

これまでほとんど家を留守がちとはいえ、突然の父の消え方に不信を抱いた敦子は、新聞社を訪ねてみるが、やはり不在。そして編集長の何やらウサンくさい態度……どうやらそれは昨日のブティックで、父がそっと敦子

いつか誰かは……

「やはりモリヤアツコは存在したのだね。やはり今年のゲームは私の勝だ」。志津は笑いながらも、探偵・橘の報告を細かく検討する。新聞社でのドタバタで橘が奪った敦子の生徒手帖に感慨深げに見入る志津。何やらいわく因縁がありそうなのだが、それはほとんど面（おもて）には出さない。敦子の出生には何の秘密があるのだろうか……。

いつか誰かと……

敦子は高良がリーダーとなっている妙なグループに身を寄せることになる。ミュージシャン、バイヤー風の男、日本語ペラペラの外人達。父の一件から、敦子にとっての東京は不気味な街になったのだが、こうした人物と会っていると、ますます東京が奇妙な街に見えてくる。しかし、美人である梨花ら、グループの優しさは、実に心地良い暖かみを持っていたのだ。彼らは偽ブランド商品を売って生計を立てている、まがい者師達ではあったのだけど……。

いつか誰かも……

やがて正太によってフロッピーディスクの内容が解読された。それによると、何と東京で暗躍する国際スパイ組織のリストの全てが載っているのだ。そして敦子の父も、スパイの一員だったのだ！

解読に成功したと同じ頃、国際スパイの組織に捕えられていた父は、この世の人でなく

のバッグに忍び込ました小さなフロッピーディスクに原因がありそうなのだ。「父は私に何かを託したのだ」。敦子はその足でクラスメイトのパソコン少年・正太にその解読を頼んでみる。

いつか誰かへ……

家へ帰った敦子はめちゃめちゃに乱された部屋を見て悲鳴をあげる。そして敦子を突き飛ばして家を飛び出す男女ふたり連れ。もうろうとしている敦子に父からの電話が入った。しかしロクに話が出来ぬうちに電話は切れてしまった！　翌日、ふたたび新聞社を訪れた敦子はまたまたビックリする。新聞社はツブれていたのである。そしてフラリと現われる得体の知れぬ男（実は永山家から派遣されたドジな探偵なのだ）。その男をふり切って新聞社を飛び出した敦子に襲いかかるは、昨日の奇妙な男と女のコンビ。何せ拳銃まで携帯しているホンマモン!?　なのである。愛車で逃げまわる敦子を救ったのは例のブティック店長・高良と店員・趙だった。

なろうとしていた。そして、敦子が隠れていたグループの家も警察の急襲を受ける……。

敦子が、18歳の今まで、さして抵抗もなく受け入れてきた日常から、どんどん偽りの仮面がはがれていったのである。「偽物にも、光っている偽物と光っていない偽物があるのさ」と高良は言っていた。自分にとって本当に手ゴタエのあるものは……敦子の胸には本物のトキメキが起ろうとしていた。とにかく思った通りに行動しなければ何も生まれはしない!!

いつか誰かが……

敦子と高良に呼び出された国際スパイの一団がホテルのロビーに集まっていた。その中にはあの新聞社の編集長もいた。夏休み中を追い回され、父の死まで至らしめたスパイ抗争に対するオトシ前を、敦子流につけてやろうというのだ。フロッピーディスクを解読して得た秘密のコピーが全員に配られる。唖然とする一同。「こんなものを秘密にしているからいけないのよ」と敦子がつぶやいた。

その一団の中には、例の探偵がヨレヨレの恰好で微笑んでいた。敦子と接触をはかろうとするたびに、アクシデントにまきこまれていたのが、ようやく志津から託されていた招待状を敦子に渡せるのであるから。

＊　＊　＊

志津は目の前に座っている敦子を感慨深げにみつめていた。直接の血のつながりはないにしても、遠い国・満州を。自分の青春を想い出させる若々しいその姿。敦子は志津の若かりし時、一人の男を競い合った友人の孫だったのだ……。

——敦子のハードだったサマータイムは終わりを告げようとしていた。夕陽の中にたたずむ高良をふり返る敦子。敦子には確信があった。この夏の始まりと終わりでは顔つきがまるで違ってきていることを。そしてもっとイイ女になって、いつの日か高良の前に現われるのだ。

キック一発、夕焼の中に赤く溶けこんでいく敦子の疾走するシルエット……。

崔洋一監督インタビュー

田島　隆久

「よく、娯楽映画だから理屈なしに楽しめなんて言うけどさ、あれはまるで嘘っぱちだと思いますよ。どんな映画でも監督なりライターなりプロデューサーなりの思いや考え方というのは絶対投影されますよ。娯楽映画だから右も左もまん中もございません、どうぞ楽しんで下さいというのは非常に嘘っぱちで、どんな映画にでも絶対主張はあるはずだし、(主張が)なければ(映画を)作る必要はないものね」と、崔監督はきっぱりと言い切る。

　崔監督の最新作「いつか誰かが殺される」を筆者はこの文を記している現時点（9月16日）では見ることができず、しかし赤川次郎の原作と高田純の脚本を読み比べてみれば、どう映画化しようかという崔監督の意図は、明瞭に見えてくる。ヒロイン守屋敦子（渡辺典子）が父親から教えてもらったという"ビー、チャムドゥ、ヘイル、テイ"(私はお前のことを愛している）という言葉に、崔監督の思いが込められているのだろう。映画「十階のモスキート」「性的犯罪」、TVムービー「孤独な狩人」「恐怖」「松本清張の断線」というこれまでのフィルモグラフィの中でも、崔監督は表立って、そうした国籍を越えるものを暗示させるようなことはしなかった。初の〈青春映画〉という、自らの資質から言えば、未知のジャンルを手がけるからこそ、そうした要素を初めてドラマの中に組みこんでみる気になったのではないか。

「映画の中で一見根無し草（デラシネ）に見える集団が登場するんだけど、僕は彼らこそが実はナショナリティを持っている人たちで、自分のナショナリティにこだわるからこそ、越境（ボーダー）者同士たちの結びつきが出来たんじゃないかという気がする。もちろん日本は多民族国家ではなく、基本的には単民族国家ですよね。外国人は80万人近く住んでいるけれど、それはやや歴史の変型で、かつての戦争を歴史の間に挟んでいる朝鮮人や中国人が多いわけだけれど、それとはちがった意味で日本における外国人たちのあり方というか――東京という都市の中で昔ほど非日常的なことじゃなくて、越境（ボーダー）者たちが勝手に歩けるようになってきたんじゃないか。一見無国籍で無原則な集団のように見えるけれども、実は、ひとりひとりの原則を認めあってつきあっている、そういうふうに描きたいと思った」

　そして、「十階のモスキート」の内田裕也、「恐怖」の勝野洋、「松本清張の断線」の松田優作、いずれも主人公たちは、日常から非日常へ、犯罪を契機に負の世界へ踏みこみ、周囲を巻き込んでゆく――歯切れの良い演出で定評のある崔洋一監督の世界は、実は役者たちを画面の中に泳がせて、どう変貌してゆくかをじっと見つめる視線の映画でもあるのだ。井筒和幸監督「晴れ、ときどき殺人」で女優としての可能性を垣間見せた渡辺典子との新たな出会い――。

「この映画の主題は、18才の少女が何によって変貌していくのか、その過程を描いていくこと。実際の渡辺典子の年齢は19才なんだけれど、役柄としてヒロインがなぜ18才であるかというのは重要なポイントだと思う。その年頃の女の子というのは、変化しない子は変化しないんだけれども、感性や感度の高い子は、あらゆる事物や事象に非常に興味を示して、いろんなことを一番吸収しやすいということがある。だから当然ここには恋もあるし家族もあるし、大げさに言えば社会と人間関係みたいな、そういうことが描けたんではないかと思う」

　自らの指向する映画と、渡辺典子主演映画という場を叶う限り接近させて、崔監督は新たな地平に飛び出そうとしている。幸福な出会いであったことを願わずにはいられない。

NORIKO

三番目にやってきた「役者」

高平　哲郎

デビュー作と二作目は斎藤光正監督。次が井筒和幸監督。そして今度が崔洋一監督。それにテレビ映画の〝探偵物語〟が高橋伴明監督。デビュー3年にして個性ある4人の監督の映画の主演女優をやれたわけで、ハタから見れば幸運かもしれないが、もうひとつの見方をすれば十代の少女が、よく——耐えたか苦しかったかは知らないけれど——やったと思う。

渡辺典子は、薬師丸ひろ子、原田知世に続く、いわば角川映画の三番手のスターである。いまさら、そんなふうに言われるのも、本人は不本位かもしれないし、私は私ですかもしれないが、三番手とはいえ、そういう幸運な星のもとにいることは、まぎれもない事実である。

この3人は全く違うタイプのスターである。いや、3人が3人とも同じ次元でスターという言葉を使えるかというと、そうでもないような気がする。原田も、薬師丸は、まさにキラキラ光るスターだ。しかし、渡辺典子は、二人に比べるとまだスターっぽくない。それは力量とか人気だとかという問題ではない。彼女はスターを目指していない妙な雰囲気を持っているのだ。彼女はスターでなく女優を目指しているに違いないのだ。そうした、いわば秘めた決意みたいなものが、いつも彼女の眼光の中に見つけることができるのだ。

華やかだったかつての映画の黄金時代に、キラ星の如く輝く映画スターは何十人といた。それがあっというまにスター不在になり、アイドルの時代に突入した。人気者は、アイドル・スターになり、映画はスターの時代から役者の時代に変った。角川映画は、無闇にテレビに出さずスクリーンの上だけでの女性スター作りをして、テレビのアイドル・スターとは一味違ったスター作りに、かなり成功している。にもかかわらず、3番手の渡辺典子の眼光には、スターよりも役者になってみせ

るという気迫があるのだ。突発的主演とはいえ〝積木くずし〟が、彼女に何か強力なインパクトを与え、眼光を変えた。薬師丸にも原田にもできない——あるいは、させない——役を渡辺典子は演じたのである。

50ccのスクーターで麹町を走る渡辺典子には、スターらしさも女優らしさもない。だからといって齢相応の女の子にも見えない。バイクを止めてスタジオに入って行く後姿には、仕事をしている役者の貫録さえ感じられるのだ。

★主題歌

いつか誰かが……

作詞 阿木燿子　作曲 宇崎竜童　編曲 萩田光雄

異邦人の中を　歩いているみたい
誰もが淋しさを　薄いベールで隠しているわ

あなたは誰ですか　何処(どこ)へ行くのですか
そう尋ねてみても　みんなきっと答えられない

家族の神話は素敵な幻
星座がいくつもの星の集りだと
思えばやさしくなれる気がするの

現われますね　私にも　いつか誰かが
待ってるのです　その時を　いつか誰かが

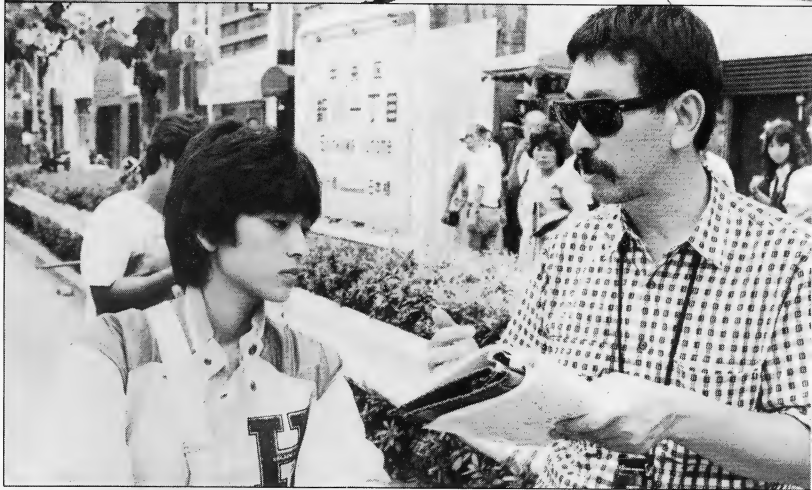
異教徒なんですね　やっぱりあの人は
同じ花を見ても　蘭と薔薇ほど違っているわ

未来のあなたなら　感じてくれますか
心のオアシスの水をそっと掬(すく)うみたいに

家族の神話は今では幻
孤独と孤独とが　ぶつかる水晶ね
昨日をうつして　弾けてゆくのよ

まかせましょうか　私にも　いつか誰かが
明日の愛は　風向きで　いつか誰かが

そうよ出逢いは謎解きね　いつか誰かが
憧れ連れて忍びよる　いつか誰かが

★製作エピソード★いつか誰かの…………SUMMER TIME

赤川次郎原作の同名小説は映画化にあたって大幅に脚色され、原作には登場しない魅力的な人物を軸にドラマは構築された。すなわちヒロインの名は守屋敦子、18歳。これをクランク・インの日に19歳になる渡辺典子が演じるのである。映画と現実の、ふたりの少女が、少女から大人の女へと成長していく様がピッタリとシンクロするサマータイム（夏休み）を描こうというのが狙いなわけだ。オートバイとロック大好き少女というキャラクターが明確になり、原作は解体され、再編されてゆく。パソコン少年や正体不明のイイ男が次々に生み出され、舞台である東京の全貌も浮かんできた。そして典子には前作「晴れ、ときどき殺人」の撮了後すぐ、バイクとエレキギターの特訓が待っていた。製作発表直前に右手親指を5針もぬうアクシデントがあったりしたのだが、さほど重いケガにはならず何とかギリギリで撮入することになってホッと一安心。

記念の SUMMER TIME でスタート

7月22日　記録的な猛暑の中でのクランク・イン。留守がちの新聞記者の父とのデートという設定。デート場所はオートバイ好きの敦子というわけで原宿のバイクショップ、そしてこの店は世界的レーサーとして名高い生沢徹氏の店を借りたものだ。午前中に撮り終えて、午後は二子玉川の学校での通学シーン。前作「晴れ、ときどき殺人」は近年珍しいオール・セット撮影映画だったが、この「いつか～」は全編オール・ロケ撮影という凄じいもの。連日ロケ・ハンがある忙しいものだが、サマータイムの雰囲気を生み出すには最適の撮影法なのである。

ところで、この日の撮影を終えて、ロケ・バスで着替えた典子を待っていたのはお祭り好きのスタッフの歓声。バスから降りた途端に〝ハッピー・バースディ〟の大合唱だったのだ。たまたまインの日と19歳の誕生日が重なったため、スタッフが特大のケーキを用意して待っていた。その上、今日は出番のなかったヒーロー・高良、こと古尾谷雅人まで忙しいスケジュールをぬって駆けつけてくれての乾盃シーン。一瞬、典子の目もうるんでしまった。典子にとっては本当に記念すべき、また守屋敦子にとって祝福すべきサマータイムがスタートしていった。

バイクとギターが SUMMER TIME の基調音

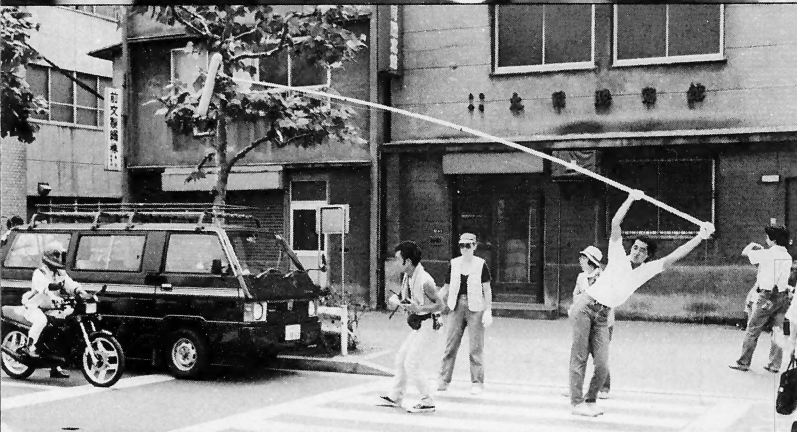
全編スピード豊かな青春映画をということでバイク・シーンが多いのだが、心配されたのは典子のウデ。50 ccのお買物バイクなら乗りこなしていた典子だが、クラッチ付のバイクとならばトレーニングは必要だ。だがそれもイン前のアクシデントで充分ではない。いったいどうなることかと思われていたのだが、いざ現場で乗ってみると、軽々と、クルリとUターンなんぞを見せて、〝おっ！　やるじゃない!?〟と安心させてくれた。とはいえ、トラブルはつきもの。正太君（尾美としのり）との自転車置き場の撮影では、ブルン！　と発進させたのは良いが砂場にハンドルを取られてコテンと転がった。スタッフらが慌てて近寄ってみたが、典子はケロリと立ち上がった。しかし足元にはミラーがヘシ折れて転がっている。〝あのまま乗っていると私がケガしそうだったから、パッと手を放しちゃった〟。

ホッとしたのもつかの間。替えのミラーは用意していない。といって近場にバイクショップもないのだ。スタッフ一同、思案にくれて回りを見わたしていたが、ニヤリ!!　ここは自転車置き場でバイクも多い。似たミラーを借りるのはワケなかった。本当に拝借しただけですよ！

バイクと同じく心配されたのはギターの練習。何とかなっているかと監督が聞いてみる。「典子、ここの音、ちょっと出してみろや」「ハイ」と、返事はバツグン。「ヨーイ、スタート」

パリパリパリ……。

前のめりに頭をかかえる監督。爆笑のスタッフ。典子も舌を出した。ほとんど覚えていないのだ。ところがその撮影用の赤いエレキギターを典子はいたく気に入ってしまった。今後の歌手活動でも必要だろうということもあって、このギターは事務所が買うということになり、典子は家に持って帰った。

その深夜、事務所のマネージャーの家の電話が鳴った。受話器を取ったマネージャーはわが耳を疑った。受話器の向うで、典子はチェッカーズの曲ほかをコピーして聞かせるのだ。自分の所有物にした途端にヤル気を見せ、完璧にやってのける。〝このシッカリモノ!!〟

まさに守屋敦子ではないかとスタッフは唸ったものだ。

ジャニス or 典子 in SUMMER TIME

♪ SUMMER TIME TIME TIME………

静かに敦子が唄い出す。白竜たちバンドが合わせせる。そして、高良らグループのメンバーがメロディに乗ってゆく。この映画の中で典子のファンにとっても、作品中で敦子にとってもターニング・ポイントとなる重要シーンだ。クランク・イン前より崔監督は、典子に「サマータイム」を唄わせることにしていた。名曲として数々のスターによって唄われている「サマータイム」。その中から監督は〝ジャニス・ジョプリンの「サマータイム」〟と指定してきた。〝PEARL〟の呼び名を持ち、この世を一瞬のうちに走り抜けてしまったロックの女王。その叩きつける様な、そして突き抜けるような唄い方、そんなジャニスの「サマータイム」を唄うことによって敦子の中で何かが変化していくはずだ。

典子は監督の意図に近づくために熱唱する。

♪ nonono don't you cry……

監督の「オッ！……OK！」とともにスタッフの拍手と歓声がおこる。そして全ての撮影が終り、ひとしきり、ビートの利いた〝サマータイム〟は終った。

ビッグマン・雅人の SUMMER TIME

のっぽのヒーロー・高良＝古尾谷雅人。

〝俺の演じる役のキャラクターの設定はほとんど無くって、俺そのものが高良だと言える。でも、かえって難しいんだよね。地でやれば楽だと言うけれど、〝ちょっとヤバイよ〟と言いながらの出演だ。典子とは初共演だが、「積木くずし」の熱演で知って気になる存在だったらしい。〝目の大きな女優さんって、キメ細かい演技をする人が多いから〟と、多くは語らないが息をピッタリ合わせてみる。

そのヒーローが一番マイったことは何か⁉

崔監督の演出はテストを何度かくり返してOKを見つけていくスタイルで、役者さんの芝居に対してはあまり注文をつけるほうではない。しかし、ヤムにヤマレズ、監督が演じながら指導する時がある。動作を典子に教えるのならともかく、

和夫「行くのか？」

敦子「うん、コーラさん」

敦子「今のままの私じゃ、恥ずかしい」

和夫「……！」

というようなシーンを監督が自分で演る時があるのだ。〝古尾谷、俺は典子だ。いいか、目をそらすな、俺は典子だ〟と言いながら、あのヒゲ面で、守屋敦子になりきってしまう。古尾谷氏の頬がピクピクと震え、こらえきれずに後ろを向くのはしょうがないというのはスタッフの一致した意見だった。

クレイジーホット SUMMER TIME

とにかく暑く、ホットな撮影記なのであった。浅草にあるお風呂屋さんのペントハウスを使った正太君のパソコン部屋、高良たちが生活してたソーホー……撮影のライトをガンガンあて、小さな部屋に多勢の人間がうごめくからワン・カットごとにドア、窓を一斉に開けて風を入れこむ。外では暑くて汗がふき出してくるというのに、外気に当たると涼しいぜ！ と感じるほどの異常な撮影で突っ走ったのである。

シッカリモノの敦子、いや典子という評判をとった典子は、ロケが多かった浅草ではなじみの氷屋さんを作って、そこのおばあさんと仲良くなり、オマケツキの氷で涼をたっぷりとっていた。〝わ！ ありがとうございます〟と微笑む典子の笑顔は100万$の笑みといえ、みんな、シッカリとマイってしまうのだ。

敦子＝典子のアフターアクション SUMMER TIME

映画の中での最初とラストの典子の表情をしっかりと見てとって欲しい。おそらく全然違った顔をしているはずだ。そういう意味で渡辺典子は守屋敦子になり得たと思うし、敦子が劇中でいろんな人間と出合い、裏切られたり助けられたりしながら、成長していったのと同じように、典子も僕らスタッフやベテランの俳優さんら仲間と出合い、成長したと思う。そのひとつの表われが見えると思う。とにかく、主役で4本目の典子に負けないように僕も3本目の映画を作ったわけだが、〝いい映画になったと思うよ〟とは崔監督の弁。

ほとんどプロレスラーといえるくらいのタフな体力にまかせて、炎天下の撮影を先頭切って引っぱっていったハードな監督の、ハードで、キュートなフィルムを、じっくりと楽しんでみてもらいたいものだ。

女優になってから三年目になりますが、夏になると「今年もまた撮影の季節がやって来たな」と思います。

クランク・イン前はいつも気持ちが昂るのですが、この作品では直前不注意から右手の親指にケガをしてしまい、映画のためのバイクやギターの練習ができなくなってしまいよけいプレッシャーがかかりました。

でも、この映画のインの日は私の十代最後の誕生日と重なり、スタッフみんなが祝ってくれて特に印象ぶかい映画になったわけです。前作「晴れ、ときどき殺人」のオール・セット撮影とは正反対に「いつか～」ではオールロケーションでしたので、猛暑との闘いもあって、最初の2週間ぐらいはちょっとペースをつかみきれなかったのですが、次第にスタッフの方の考えられていることや動きがよく分かるようになり、それを過ぎるとグンと乗っていけるようになりました。

崔洋一監督は、これまでの監督さんと比べて、そんなに細かな演技指導をなさらない方でしたので、私がわりあい自由に敦子という同じ高校3年生の少女を解釈し、動きまわることになりました。もちろん、監督の考えているのと違う動きになると的確なアドバイスがすぐ飛びこんでくるのですが、とにかく全般的にノビノビと映画の中で呼吸が出来たような気がします。私が自分で考えながら演ずることを要求された今回の作品は、女優としての私のひとつのステップであり転換期でありえたのではないか、と思うのです。

〔渡辺典子〕

STAFF

製作／角川春樹
原作／赤川次郎（角川文庫版）
監督／崔 洋一
脚本／高田 純
プロデューサー／紫垣達郎・伊藤亮爾・黒澤 満
撮影／浜田 毅
照明／井上幸男
録音／小野寺 修
美術／小川富美夫
編集／鈴木 晄
助監督／成田裕介
製作担当者／川崎 隆
音楽／梅林 茂
主題歌／作詞・阿木燿子 作曲・宇崎竜童
唄・渡辺典子（コロムビア・レコード）
製作協力／セントラルアーツ
角川春樹事務所・東映提携作品
配給／東映

CAST

守屋敦子……渡辺典子
高良和夫……古尾谷雅人
梨 花……松原千明
趙 烈豪……白 竜
橘進之介……石橋蓮司
渡壁正太……尾美としのり
守屋陽一……斉藤晴彦
永山杜夫……河原崎長一郎
永山萌子……白川和子
永山亜美……真木洋子
山形剛志……橋爪 功
永山志津……加藤治子

定価・300円 昭和59年10月10日発売
製作／発行・東映㈱映像事業部
アートディレクター・松山昴司 デザイン・田代晴美

いつか誰かが….
渡辺典子

角川文庫／赤川次郎

いつか誰かが殺される ●定価340円

- セーラー服と機関銃 ●定価420円
- 血とバラ ●定価340円
- 悪妻に捧げるレクイエム ●定価340円
- 一日だけの殺し屋 ●定価380円
- 孤独な週末 ●定価300円
- さびしがりやの死体 ●定価340円
- 昼下がりの恋人達 ●定価380円
- 悪魔のような女 ●定価340円

- 黒い森の記憶 ●定価340円
- 死者の学園祭 ●定価340円
- 名探偵はひとりぼっち ●定価300円
- 赤いこうもり傘 ●定価300円
- ひまつぶしの殺人 ●定価420円
- 僕らの課外授業 ●定価340円
- 晴れ、ときどき殺人 ●定価340円
- 結婚案内ミステリー風 ●定価460円
- 世界は破滅を待っている ●定価380円
- 殺人よ、こんにちは ●定価340円
- 三毛猫ホームズの推理 ●定価420円
- 三毛猫ホームズの怪談 ●定価460円
- 霧の夜にご用心 ●定価380円
- 探偵物語 ●定価380円
- 招かれた女 ●定価380円

角川書店